

史訪歴探 羈旅日和 石廊崎灯台

石廊崎灯台は、静岡県伊豆半島最南端の石廊崎に立つ白亜の塔形の中型灯台です。石廊崎は昔から航海の難所で、この沖の岩礁で座礁・難破する船が多かったため、多くの船頭たちから灯台設置の要望があったそうです。

明治4年に初点灯し、当時は木造八角形の構造でしたが、暴風で大破し、昭和8年に現在の形に改築し、平成5年に外壁をタイル張りにしています。この灯台は日本では10番目に古い洋式灯台です。

点灯開始から平成6年まで、灯台の近くに職員と家族が暮らし、灯台を直接保守していましたが、現在は下田から定期的に職員が訪れ、点検保守を実施しています。

灯台の直下には、けわしい断崖と吹き抜ける潮風、南伊豆の奇岩、そして雄大な太平洋の眺めが感動を与えてくれます。

青野川の河津桜

石廊崎の周辺には、黒船由来の下田港があり、隣接する南伊豆町は河津桜が有名です。東京駅からJR特急伊豆踊り子号に乗って2時間半、終点の「伊豆急下田駅」からは下加茂方面の路線バスに乗り、九条橋停留所で降車すると、目の前には道の駅「下加茂温泉・湯の花」があり家族連れでにぎわっています。

南伊豆町では河津桜の開花時期に合わせて「みなみの桜と菜の花まつり」が開催されており、青野川の土手沿いにある遊歩道が、満開を迎えた河津桜の並木道となっていました。

また、銀の湯会館の敷地内には、幸田露伴文学記念碑があり、露伴はこの温泉の河原に穴を掘り、川の水で湯加減を調節する風雅な露天風呂を好んだそうです。

露伴の本で印象的なのは、「幸田露伴集・怪談」で、明治から昭和時代までの作品が掲載されており、昭和時代の執筆「幻談」は口語体で読みやすく、明治時代に執筆した「対髑髏」は文語体で重く、読後も物語の悲しみが心から離れません。大正時代に執筆された「観画談」は、文語体と口語体の葛藤が気になります。

近代文学の小説家幸田露伴がこよなく愛したという温泉に不思議な愛着「海員だより」